

研究

鶴見半島の猪垣について

南海部郡鶴見羽出浦

賛助会員 安部弥右衛門

右に關しては、昨年七月発行「佐伯文談」第八十三号誌上に「猪垣の築造と灰床の開発」と題して、有明浦から中越浦鯛網代までにある猪垣について發表いたしました。だが、今回はそれに續いて、中越浦米ヶ浦から、島江・猿戸・丹頃・梶寄各地にある、未発表の猪垣を御紹介いたします。

尤も、有明浦から鯛網代までの猪垣は前記誌上に發表済であります。便宜上その大要を更に掲げましょう。  
(前畧)

始めの第一期工事と考えられるものが最も規模が大きく、図の如く日野浦の村はずれから、山の斜面を山頂に向つて伸び、帆波浦や羽出浦の境界線に沿つて、山の尾根伝いに、戸の上山の八ヶ谷目位の新まで上り、方向を南向きに変え、戸の上、高瀬ヶ谷、灰床の上方の山腹を横断した後、西の浦から登つた、旧竹野浦道路を山頂で超えて、中越浦の中津浦山との境界線に出で、そこから方向を、戸井崎の尾根向きに北に下り、灰床台地の東は、ずれで二つに分岐し、その一線は尾根の西側の山腹を斜めに、龍石の谷間まで下つてゐる。

また他の一線は、尾根の東側の斜面を中津浦の釜床まで下り、そこで又分岐して、その一線は山の中腹を北に

延びて、釜ヶ嶺の断崖の上に達する。(これで日野浦・帆波浦・鯛網代及び羽出浦の全域を囲んでゐる。)

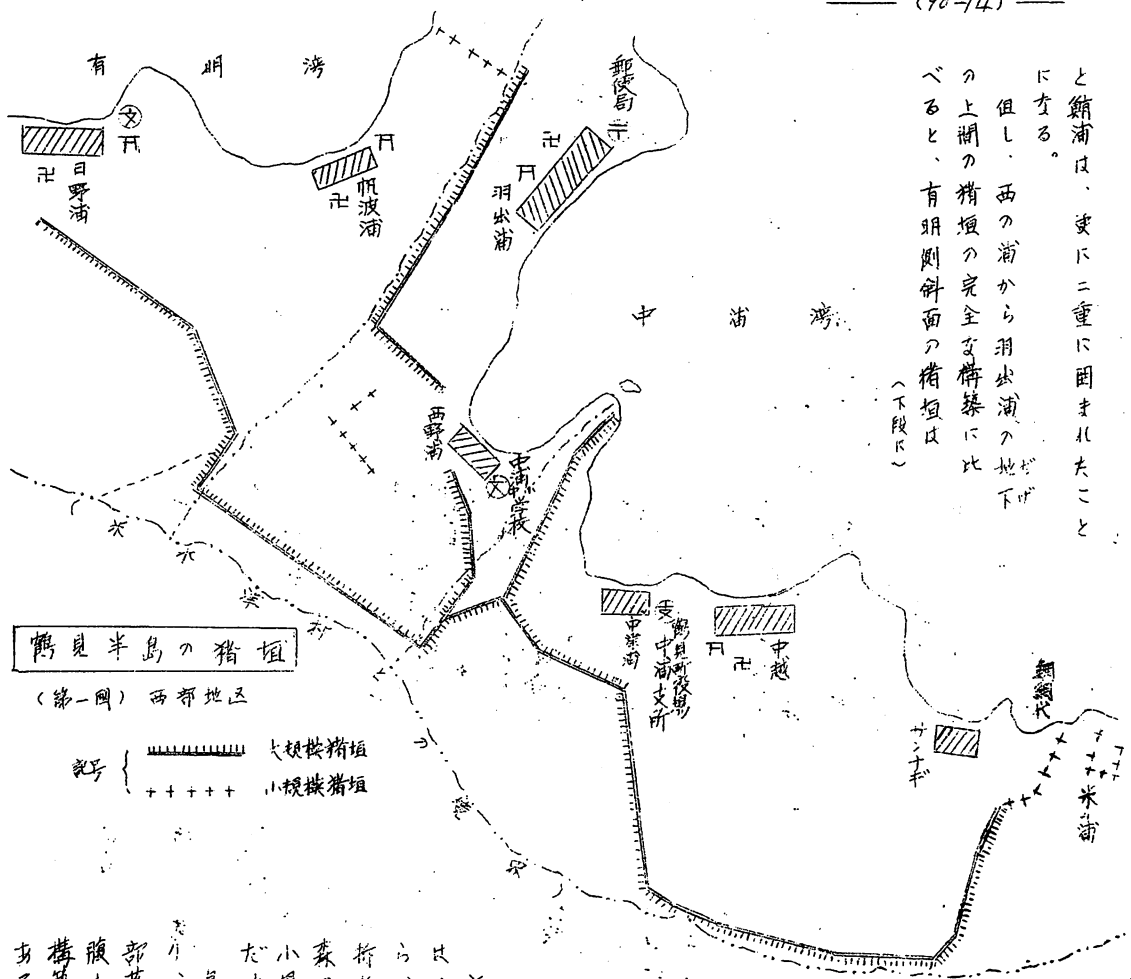
また別の一線は、釜床から東に向かつて、大蔵山の山腹と山麓にある耕地との境目を横断して谷間に達した後、山の斜面を峯向きに上り、高嶺山に達して米水津村との境界線である小浦道に出て、それから、昔丹頃・梶寄から浦代、木立経由で佐伯所に往復してゐた、旧道の狭い山道に出る。この小道をいかに山頂まで中越と猿戸の上きすぎ、鯛網代の山頂に達し、左に折れて山の斜面を鯛網代の山麓まで下り、更に東に折れ又北に延びて、耕地の東側に沿つて海岸近くの崖に達してゐる。

この一連の猪垣は、中津浦、中越、廿二ヶ、鯛網代の部落と耕地を囲んでゐる。

右の外に、羽出浦と鯛網代を囲む内堀とも見られるが、その規模の大きい猪垣がある。これは幕末頃の工作だつたように、故老から聞いた記憶がある。

その猪垣は、西野浦マツバ谷の谷間から、山腹を北西に上つて、羽出浦と帆波浦との境界線である山の尾根に達し、更に尾根に通じていた旧浦代―木立―佐伯道路に沿つて、稍北寄りの方向へ、ヨソイ谷、コドウ、作網代の上を徑つて地下の上の山頂で止つてゐるのであるが、別は一線の猪垣がこれに連続してゐる。現在は道路中だけ断たれてゐるけれど、昔は木戸が何か出入口を設けていたものであるまいか。しかし今日その形跡は見られな

い。  
その猪垣は、道路を距つた山の斜面を横線き西に向つて下り、昔の羽出―帆波浦道路を越えて、小久保浦入東側を海岸近くまで延びてゐる。この猪垣により、羽出浦



と猪浦は、更に二重に囲まれたこと  
に在る。  
但し、西の浦から羽出浦の地下  
の上湖の猪垣の完全な構築に比  
べると、有明側斜面の猪垣は  
(下段下)

鶴見半島の猪垣

(第一圖) 西部地区

大規模猪垣  
小規模猪垣

江戸時代から明治・大正と、昔地(かむち)の盛んな時代下  
は、魚見張場所であつた島江の西端北の、山の丘近くか  
ら、一連の猪垣が、山腹を少し上りの方に伸びる後、東に  
折れ、耕地の上端を庵寺の上(うで)で小谷を渡り、更に東  
森の上の方に耕地の外側を巡って延びている。この  
小規模な猪垣は、完全というには程遠いが、個人でこれ  
だけの仕事をしている熟意(じやくい)は、敬服の外はない。  
島江部落の東に当る立岩(たていわ)という所から、山の斜面を上  
り、更に東に折れて、米水津村との境界線に沿ひ、猿戸  
部落の上向方に進み、中山の上より更に北に折れ、山  
腹を橋下(はしも)向つて下り、中山の西端、海岸の岩場近くまで  
構築されて、ここの中なる耕地は島江部落の裏氏のモノで  
ある。

綱網代から小土坂坂一つへだてた米ヶ浦の浜辺は、  
浸潤深く一団の耕地があり、これにも猪垣を造つて  
いるが、個人の小規模猪垣としては、長く出来てい  
ると思う。(上野古端)

米ヶ浦から擬野浦までの猪垣は、どうであるか  
区次に紹介するが、以上について地図を一覽収  
めたい。

施工が汚濁の感なしとせずとの観もある。  
この外にも、個人または小集団で造つたと見  
られる猪垣が、西野浦地内に数個ある。  
以上は、日野浦一綱網代間にある猪垣の再掲  
である。

(佐伯史談第八十三号(昭和四年七月発行)に「猪垣の築造と灰床の調査」と題して發表した)

次に中山の東端<sup>東</sup>の海岸から、斜面と山の尾根に向つて進み、尾根近くで東方に折れて後、氷水津村界の尾根に達し、この尾根に沿うて猿戸部落の上を過ぎた地点で北に折れて、海岸の岩場の上まで下つてゐる。この猪垣も頑丈に構築されてゐる。

この辺り山が低いので、視界は格別広くないが、一方に佐伯湾や、豊後水道を隔てては五分の四の山を望み、一方には氷水津湾があり、白砂青松とも言うべき麗越の里が眼下にある。この浜は毎年海亀が訪れて、産卵することでも有名である。またこの猿戸と中山の浜辺は昔小引網業の盛んな時代には、鮫・鰯・鯉などの好漁場であつた。

次は海岸低いに、猿戸から広浦に行く途中に、惣与六<sup>そうよむ</sup>網代<sup>あみしろ</sup>という、今は無人部落がある。ここにも荒れた畑を囲んで、山裾に小規模な猪垣がある。このような猪垣は、何人が、親戚や村人の助力を得て構築したものである。この部落を過ぎて、間もなく広浦部落に入る。人家の上側に耕地があり、この耕地を囲む山林との間に一連の猪垣を作つてあるも、小規模な猪垣である。この辺りの部落を「マウラ」と林える。

この広浦の東は北に、寺屋敷と林えるとこゝろがあり、畑の周囲には小規模な個人猪垣がある。

以上で、日野浦から広浦までの猪垣探訪は終り、次号では丹原浦と梶野浦の猪垣について述べよう。

(以下次号)

(地図についておこしあり)

筆者は長々、四ページにあたる一紙地図を描いているが、取扱いに困るので三枚にわけ(次号一枚)掲げた。諒承を乞う。(編者)

鶴見半島の猪垣

(第二回) 中部地区

